人妻乱戯

牧村 僚

第一章　喪　失

1

「あら、お帰りなさい、隆史くん」

学校から戻って茶の間に入ると、隣家の人妻・寺原有美子がほほえみかけてきた。北川隆史はどぎまぎしながら、なんとか会釈を返した。有美子は母とお茶を飲んでいたらしい。

「早く着替えてらっしゃい。お茶、用意しておくから」

「あ、ああ、そうだね」

母の言葉に曖昧にうなずき、隆史は階段をのぼった。カバンを放り出して制服を脱ぎながら、先ほどの有美子の姿を思い出した。いつもどおりミニ丈のスカートをはき、座布団の上に横座りになっていた。スカートの裾から剥き出しになった白いふとももが脳裏によみがえり、股間のイチモツが急激に硬さと体積を増しはじめる。

「おばさん」

ズボンを脱ぎ捨てたあと、隆史は思わず声に出して言い、右手を股間にあてがった。白いブリーフはペニスに突きあげられ、テントを張った状態になっている。

隆史は県立高校の三年生、十八歳になったばかりである。東京の有名私大に合格し、いまは最後の高校生活を楽しんでいるところだった。だが、クラスメートたちと遊んでいても、いつも頭の中には有美子の姿があった。小学校六年で性の目覚めを迎えて以来、隆史にとって有美子は、格好のオナニーの対象だったのである。

下半身はブリーフ一枚のまま、隆史はふと思いついて、机の引き出しを開けた。三段あるうちの一番下で、奥から黒いビニール袋を

取り出す。中から出てきたのは、レースの縁取りのついた、淡いブルーのパンティーだった。半年ほど前、隣家の庭に干されていたものを、衝動的にポケットに詰め込んで持ってきてしまったのである。

有美子が身につけたパンティー。そう考えただけで、この薄布は隆史にとって宝物になった。毎晩のオナニーの際には必ず手に取り、顔に押しつけたりしている。週に一度くらいは、思いあまってパンティーに向かって白濁液を放ってしまうこともある。そんなときは丁寧に手で洗い、母に気づかれないように部屋の中で干している。

おばさんが待ってるんだ。急がないと。階下に有美子がいることを思い出し、隆史はパンティーを袋に戻した。スエットパンツとトレーナーを身につけ、あわてて階段をおりる。

向かい合って座った母と有美子の間に、すでに紅茶が用意されていた。隆史は腰をおろし、カップを手に取ったが、左側にいる有美子が気になって仕方がなかった。相変わらず横座りになっていて、白いふとももが剝き出しなのだ。前方から眺めれば、おそらくパンティーも拝めるだろう。

「よかったわね、隆史くん。大したものよ。第一志望の大学に、ちゃんと一発で合格しちゃうんだから」

「はあ、どうも」

有美子の褒め言葉に、隆史は軽く頭をさげた。その瞬間、白いふとももの奥に、かすかだがパンティーの股布がのぞいた。色はワインレッドだ。おさまりかけていた股間が、また騒ぎはじめる。

「でも、寂しくなるわね、奥さん。一人息子が東京へ行っちゃうんだから」

「本人が決めたことだし、仕方がないわ。主

人と二人、新婚のつもりで楽しもうか、なんて話したりしてるのよ」
「あらあら、それはご馳走様」
冗談めかした母のセリフに、有美子はいかにもおかしそうに笑った。その口もとを見ていると、隆史はますます欲情してきた。真っ赤なルージュの引かれた唇に、ペニスを包み込まれた光景を想像したのだ。
ああ、やってみたい。おばさんに、フェラチオをしてもらいたい。欲求が胸を突きあげてきたが、もちろん口には出さなかった。母と仲のいい有美子に迫ることなど、できるはずもない。
視線を有美子のふとももに戻し、隆史がため息をついたとき、電話が鳴りだした。母が立ちあがり、キッチンとの境に置かれた台から受話器を取りあげる。どうやら親戚のだれかからのようで、母はにこやかな表情で話しだした。しばらくは会話が続きそうである。
そんな母に目をやってから、有美子が隆史のほうへ身を寄せてきた。必然的に膝が開かれる形になり、ふとももは先ほど以上に剝き出しになった。のぞき込まなくても、今度はパンティーを見ることができる。
「ねえ、隆史くん。お祝い、何がいい？」
「お祝いだなんて、べつに何も」
「ああん、遠慮しなくていいのよ。あたしはあなたが子供のころから知ってるんだし、ほんとうにうれしいのよ、大学に受かって。東京へ行っちゃうのは、すごく寂しいけど」
上目づかいで見つめられ、隆史はどぎまぎするばかりだった。と同時に、肉棒がまたいちだんと硬くなった気がした。両手を組み合わせて股間に置いてはいるが、もはや隠しようもないほど、スエットパンツの前の部分がふくらんでしまっている。

「なんでもいいのよ、隆史くん。欲しいもの、何かあるでしょう」
「いやあ、そう言われても」
欲しいものなら確かにあった。有美子の体である。六年以上も、ずっとあこがれてきたのだ。有美子を思ってオナニーをした回数は、たぶん千回では利かないだろう。だが、それを口に出すわけにはいかない。普段はやさしい有美子だが、おかしなことを言えば、とたんに怒りだしそうな気もする。
「お母さんには内緒でいいのよ」
考えようによっては意味深な言葉だった。隆史はぎくりとする。
「ど、どういうことでしょうか」
「もう十八ですものね。すごく欲しくても、お父さんやお母さんにはねだれないものが、いくらでもあるでしょう」
欲しくても父や母にはねだれないもの。セックスはその代表格かもしれない、と隆史は思った。しかし、有美子がそういう意味で言っているとは考えにくかった。超がつくほどのミニスカートなど、いつも挑発的な格好をしている有美子だが、隆史が具体的に誘われたことなど、ただの一度もないのである。
「ねえ、あしたは何時ごろ帰ってくるの？」
「あしたですか。たぶんきょうと同じようなもんだと思いますけど」
「じゃあ四時半ぐらいってことね」
大学合格の決まった生徒同士で遊びに行ったりもしているが、隆史はあまり参加していなかった。授業が終われば、ほとんどまっすぐに帰宅している。
「それじゃあした、あたしのところへ寄りなさいよ。おうちへ帰ってくる前に」
「おばさんの家に、ですか」
「お母さんには、少し遅くなるって言ってお

けばいいわ。友だちと会うとか、適当にごまかせるでしょう」
「ええ、それは、まあ」
「決まりね。約束よ」
「はあ」
「それまでによく考えておいてちょうだい。ほんとうになんでもいいのよ、隆史くん。あたし、何を聞いても驚かないから」
　言いながら、有美子はなんと右手を隆史の左手の甲に重ねてきた。この手の下では、勃起したペニスがスエットパンツを突きあげているのである。有美子の柔らかい手の感触に刺激され、ますます興奮は高まってくる。
　おばさん、もしかしたらぼくを誘っているんじゃないだろうか。隆史の胸に、初めてその思いが湧いた。色香に満ちた声でささやきながら、手にまで触れてきたのである。そう考えてもおかしくはない。
　ここで母が話を終え、受話器をもとに戻した。有美子はさっと手を引っ込めた。何事もなかったようにカップを手に取り、冷めかけた紅茶を口に運ぶ。
「ごめんなさい。田舎の叔母からだったの。隆史のお祝い、送ったからって」
「みんな喜んでくれてるみたいね。隆史くん、期待の星なんだ」
　しっとりと潤みを帯びた目で有美子に見つめられ、隆史の興奮はさらに高まった。あすの帰りに、有美子を訪ねる約束をしたのである。有美子には子供がいないから、必然的に家の中には二人だけということになる。
「そういえば奥さん、このごろ、下着泥棒に遭ったことない？」
　唐突な有美子の問いかけに、母はきょとんとした。不思議そうに首をかしげている。
「うちはないわね。女は一人だし、あたしの

下着なんか盗んだって仕方がないでしょう」
「そんなことないわ。奥さん、とってもすてきだもの。奥さんにあこがれてる男の子がいて、パンティーを盗んだりするかもよ」
「よしてよ、有美子さん。恥ずかしいじゃないの、隆史の前で」
母は頬を赤らめた。有美子の言うとおり、隆史の目から見ても、母はそれなりの美人だった。小中学校では、参観日のあとなどに、友人たちの間で話題になったこともある。
しかし、母はすでに四十四歳である。三十六で、子供を一人も産んでいない有美子にはかなうべくもない。
「あなたは盗まれるの？　下着を」
「ときどきやられるのよ。ついこのあいだもね。でも、一番悔しかったのは半年前ね。すっごく気に入っていたパンティーを盗まれちゃったの。薄いブルーのやつなんだけど」
そこで有美子は、なぜか隆史のほうを向いた。顔にはうっすらと笑みを浮かべている。
おばさん、知ってるんだろうか。ぼくがあの下着を盗んだこと。隆史の胸に不安がこみあげてきた。しかし、その不安が、いちだんと興奮を高めたのもまた事実だった。

（続く）

【著者略歴】

牧村　僚（まきむら・りょう）

１９５６年東京生まれ。筑波大学を卒業後、フォーク歌手を目指したものの失敗。芸能プロダクションに勤務するかたわら、音楽系のライターに転身。その後、官能小説に関心が高まり、９１年『姉と叔母　個人教授』（フランス書院刊）でデビュー。肉体的なこだわりから「ふともも作家」の異名をとる。